

すくい
女性の救抜
—— 莆仙目連戯と血盆経 ——

馬 建 華
道上知弘 訳

はじめに

莆仙とは福建省の莆田と仙游の合称であり、現在の莆田市のことである。宋代は興化軍、元代は興化路、明代は興化府とよばれ、独特の莆仙方言を用いている。人口は289万人である。(2001年統計)

莆仙目連戯は人によるもの(人戯)と木製の操り人形によるもの(木偶戯)との二種があるが、両者の物語の内容や上演の習俗は似通っている。莆仙目連戯の最大の特徴は「戯中超度」、つまり『三殿告訴』的一幕まで演じたところで、劇をしばらくやめ、超度(済度)儀式をおこなうことである。儀式が終わったあとには再び演劇を続ける。この問題を最初に提起し、さらに研究を加えたのは日本の前東京大学教授田仲一成氏である。同氏は1984年にシンガポールにおいて莆仙同郷会九鯉洞逢甲普度、および莆仙目連大戯(人戯)について考察し、あわせて明の鄭之珍による『目連救母勸善記』との比較をおこない、「舞台上でおこなわれる“目連超薦”も目連が地獄を打ち破って亡魂を救い出した物語から借りたものであり、同郷にきて死んだ者の靈魂の超度をおこなっているが、実際には超度法事の変化した形である」ので、「戯劇芸術」というより、“宗教儀礼”とよんだほうが妥当である」とし、「鄭本はおそらくこれらの宗教儀式を整理、削除し、ひとつの文芸作品に作りかえたものであり、反対に莆田本は宗教儀式要素を残して、その原始形態を示すものである¹⁾」と考えた。この結論は極めて鋭く、目連戯の戯曲史上における変遷過程や莆仙目連戯独特の特徴と一致している。

しかし、莆仙目連戯にはなぜ「戯中超度」があるのか。この問題はずっと筆者を悩ませてきた。『三殿告訴』で目連に超度されるのは血湖のなかの女性たちばかりであるが、舞台下の群衆の超度する亡魂には男女の別がない。こうした状況は血盆経、およびその発展

と直接の関係を持っている。本論文ではまず莆仙目連戯における「戯中超度」の儀式を説明し、その次に莆仙の民間に伝わる手抄本『血盆胎骨経』、『血盆経』、『慈悲血湖宝経』、『慈悲血盆宝懺』などの内容を紹介し、さらに血盆経の発展史から目連戯が血盆経を吸収した年代を推論し、最後に莆仙三一教の「転蔵」を例に取り、宗教儀式がいかに血盆経および目連破獄の内容と融合したのかを明らかにする。以上四つに分けた説明と論述においては、特に莆仙目連戯と血盆経の複雑な関係を考案しようと努めた。もって専門家諸氏の御教示を請う次第である。

1. 莆仙地区の祭祀、超度の歴史的背景

この地区では、目連戯と直接かかわる祭祀や超度の歴史文献は、今もって発見されていないが、仏教の側面からはある程度の歴史背景を知ることができる。

(1) 莆仙地区における宋代の「地獄一天国」の宗教思想と超度の風習

莆仙地区には「晩唐以来、地に仏国の号あり」²⁾とされている。宋代になって、仏教はさらなる栄えを見せる。莆田南山の広化寺は八閩の歴史において最古の寺院で、南朝陳の永定二(558)年に創建され、初め金仙庵という名だったが、後に院に昇格、隋の開皇9(589)年に寺に昇格し、唐の景雲二(711)年にその名を靈岩寺と改めた。昭宗の天佑二(905)年、全閩を統治した琅邪王の知るところとなり、写経5000巻が奉納され、同年、莆田人の監察御史で、威武軍節度使推官の黃滔によって書かれた、『莆仙靈岩寺碑銘』が建立された。宋の太平興国元(976)年、広化寺と名を改める。宋代の南山には寺は2、院は10、庵は120ヶ所あり、僧の数は数千人にも達していた³⁾。仙游龍華の万寿禅寺は唐の嗣聖元(684)年に建立され、元の元貞年間(1295-1296)年に詔勅によって付近の11の院、77の庵を管轄することとなり、僧尼は千余人に達した⁴⁾。明の弘治年間の『興化府志』によると、宋の「興化軍の寺院(廢寺を除く)は四百九十五所」とある。宋代における興化の寺院の多さ、その規模の大きさ、僧尼の多さは、「道で逢う人の半分が僧」という社会的な奇観を現出した。

宋代における莆仙仏教の主要な宗派は禅宗、臨済宗、浄土宗であったが、尊勝仏頂信仰もまた広くおこなわれた。1995年10月初旬、莆田鳳山寺から宋の淳化三(992)年の「無量寿仏宝塔碑」が出土し、石碑額には横書きに刻まれた『勅賜永福之院鎮記』の八字、碑文は縦書きに刻まれた十九行があり、その第一行目には「加句靈驗仏頂尊勝陀羅尼」の十

一字、二行目にはサンスクリット語による経呪の漢字訳が十一行、以下七行には建塔の経緯と目的、僧、官、民を含む施主の名が記されていた⁵⁾。莆田南山広化寺の兜卒天宮の前には経幢〔仏号や経文を刻んだ石塔－訳註〕が二基あり、これらは宋の治平二（1065）年に建てられた。その石塔の一つには『仏頂尊勝陀羅尼経呪』が刻まれており、その呪語は音訳漢字で、その字数は419になる。もう一基には『福德真言』が刻まれている。経幢にはまた幢を建てるために献金した善男信女の名が刻まれている⁶⁾。

『仏頂尊勝陀羅尼経』は周、隋の時代にすでに訳出されていて、唐になるとパーリ語訳本が出て後に広く流伝した。中唐には十数種の訳本が流行し、後に武徹が『加句靈驗仏頂尊勝陀羅尼記』を作った。『仏頂尊勝陀羅尼経』には次のことが記されている。すなわち帝釈天は、天子が今まで七度も畜生悪道に身を落とした業を受けたことを哀れみ、祇園精舎に詣で、仏に超度の方法を問うた。すると、仏はこの陀羅尼を教え、これを唱えさせると同時に、天帝にも、この経を耳にすれば、前世に造った悪業の一切は、みなことごとく消え去るということを告げさせたと。『仏説尊勝陀羅尼経』には、

書写陀羅尼安置幢上…若比丘比丘尼，優婆塞優婆夷，善男子善女人等，見此陀羅尼幢，若近幢，若幢影沾身，若幢風吹身，或為幢飄風飄塵着身，罪業便消。不生地獄，畜生，閻摩盧迦，餓鬼，阿修羅中，不墜諸惡趣，一切如來諸仏當与授記，得不退轉至登正覺。

とある。この経幢を製造した由来は次の二つに分けられる。一つは国を法界となして衆生の福修功德を乞うこと、もう一つは、亡者を超度することである。宋代莆仙において、募金によって幢を作り、塔を建立した善男信女たちの大部分は、自らの福寿を求めため、または亡くなった親族を超度するためにこれをおこなったのである。

広化寺の東側の釈迦文仏塔の創建された最も早い年代は、塔に銘記されているところによれば、南宋の乾道元（1165）年である。銘文の内容は、「延福消災」（福を広げ災いを減すること）だが、さらに多く記されているのは、親族の超度についてである。以下、いくつかの段を例示する。

清信崇敬三宝弟子承議郎通判興化軍兼管内勸事賜緋魚趙師造，謹施淨財一百貫官陷入広化寺東塔院，助縁建造石搭，所集妙利用伸追薦先妣太孺人張氏，亡丈母孺人沈氏十四娘子，亡妻孺人張氏小四娘子，亡妻孺人胡氏小二娘子神魂，乘茲功德速受生方，如已受生，增享人天妙勝快樂。淳照乙巳歲題。

花巖寺比丘宗谷奉為亡姉五娘資生界。

苜溪戴仏卿舍壹佰貫資祖考妣先考妣生界。

東廂蔡氏八娘施財壹佰貫足求薦亡夫許十五郎生界者。

尊勝陀羅尼經の功德と喜捨による製幢と造塔の目的を見ると、宋代の莆仙地区では済度の風習が盛んにおこなわれていたことがわかる。第一に、興化の人びとは兩宋の期間に二度、尊勝陀羅尼經を刻印しているが、これは当時の人びとが地獄への惧れと、西天往生への強烈な願いという宗教思想を持っていたことをあらわしている。第二に、塔の銘文の内容を見ると、施主は上は官吏から下は一般庶民や僧侶まで、超度する対象は歴代の祖先、父母、夫、妻およびその他の親族であり、これは「地獄-天国」の宗教思想の影響が深く広く浸透しており、その程度が熱狂的にまで達していたことを明らかにしている。第三に、『仙溪志』には、宋代の興化の風俗について「俗敬鬼神」、「婚姻は不愆於礼（礼にたがわず）、喪葬は不俛其親（親類に対してはカネを惜しまない）」とあるが⁷⁾、この風俗は上述の宗教思想を推し進め、亡くなった親族のために済度を祈る風習はますます激しくなり、その遺風は今もなお残っている。

（2）莆仙地区における明代の祭祖と盂蘭盆会

明の黄仲昭（1435-1508）の『八閩通志』には古代興化のなか元節の情景が記されている。

中元 追遠 郡人最重是節，自五六月間即漬紙而靡之，刻模印為金銀錠，捶錫為薄，以飾銀錠，煮梔子汁，染錫薄以飾金錠，家以数千計。迨是月十三日各洒掃室堂及庭，設先世像位，日具牲醴庶羞祭奠，至十六日，乃積楮錢雜金銀錠，逐位焚獻。女子適人者，或父母既没，至是亦婦奠如前儀，没身不廢，迨其子孫猶然。……計一家所費，多者錢二、三千，少亦不下数百。士大夫往往以為非礼妄費，欲禁止之。或以莆士夫家各有時祭，以展孝誠，閭左細民，終歲或不能一薦。苟於此又禁止，則是遏其孝思之良心，終無以自尽矣，故卒莫有禁之者。……蘭盆供 莆故家世族，旧皆有田租，以備盂蘭盆供之費，至中元節，輒命僧於族祠修設。近年士大夫以為非礼。悉革之，而以其田所入致祭，亦一美俗也。⁸⁾

女性の救拔

このことから、莆仙の中元節での祭祖の風俗の特徴として、次の数点があげられる。

1. 中元節は祖先を祭る重要な祭日である。五、六月より準備を始め、金錠、銀錠（俗に金紙、銀紙ともいう）、また貢元などの供物を作る。
2. すでに嫁した女性は必ず実家に帰って祖先を祭らなければならず、その子孫末代も同様である。
3. 富家宦族による毎年の祭祖の行事は一度にとどまらず、およそ祭日であれば祭った（今の風俗もそうである）。しかし一般庶民が祭るのは中元節である。
4. 規模が大きく、費やす費用も甚大であることは、すなわち上述の宋代の「喪葬不儉其親」の遺風である。

上述の文献は莆仙では祖先を祭る時にまた盂蘭盆会を催したことをものがたっているが（「盂蘭盆供」をするときには必ず盂蘭盆会（蘭盆会）があり、『八閩通志』によると、この他に福州府、泉州府などでもみな蘭盆会があった）、ここで注意すべき点がいくつかある。

1. 盂蘭盆会がおこなわれたのは中元節である（現在では下元節に多くおこなう）。
2. 盂蘭盆会の経費の源となるのは「田租」である。同姓同族の間には「公田」の収益金があり、同族の人びとは毎年これを用いて盂蘭盆会をおこなう。
3. 盂蘭盆会は祠堂で開くため、「供仏」はすなわち「供祖」になる。
4. 僧によって執りおこなわれるので、これはやはり仏教的な性格を帯びた盂蘭盆会であったことがわかる。
5. この風習はかなり盛んであったために、かつて一度禁止されている。

これらのことをまとめると、この盂蘭盆会は、家族が祖先を供養するための盂蘭盆会であったということである。

黄仲昭は盂蘭盆会の状況については記していないが、明代興化における三一教の蘭盆大会の科儀書から、おおよその状況を推測することができる。『三教蘭盆大会供祖攝召儀文』（青氣堂本。莆仙の三一教の教堂は祠堂または書院とよばれた）には

「謹当為蘭盆会首某暨合衆等一心焚香，啓召請各宗三世父母，七代先亡，九族内外宗親，冤家債主，地主等魂」，「尚有十方法界，無量無辺孤魂，或有主而無人入会者

(蘭盆大会を指す)、或無主而有意結縁者、筵中不得遍位、請向空前、稍聽候賑濟。

とあり、『三教蘭盆大会供祖解冤儀文』(青氣堂本)には「目連破獄度衆生」に触れ、

目連因救母之忱、巡環地獄、特詣靈山会上、啓白大覺世尊、願開救苦之方、特示追修之道、……与宣破獄真言、放十指毫光、照彼重重地獄、付六環金錫、傾摧寂寂幽閑、悉使阿鼻消愆……

とある。三一教の『撰召儀文』によって黄仲昭の記した家庭での蘭盆会を多少、補うことができる。例えば、家族のなかから一人を「蘭盆会首」に推し、祖先の亡魂を超度する蘭盆会を催していたこと、済度される対象は祖先および九族内外の宗族であったことなどである。ここから、三一教の蘭盆大会は、主として祭祖、つまり祖先および九族内外の親族を超度するために催すものであったこと、そして餓鬼、無主の鬼に対しては施食をおこなったことがわかる。『解冤儀文』によると、蘭盆会と目連救母は大いに関係があった。

三一教の「三教龍華醮禱」、「蘭盆大会科儀」は三一教主であった林兆恩(1517-1598)の嫡伝弟子の盧文輝(1564-1617)の命により、そのまた弟子の陳衷瑜(1589-1655)が万曆三十七(1609)年に編纂したもので、陳衷瑜は仏教の蘭盆会を参考にし、民間の風俗習慣に基づき、一ヶ月かけて上述の科儀書をまとめた⁹⁾。これより先に、林兆恩は嘉靖四十三(1564)年に「諸人の求め」に応じて、「莆仙など各地で游魂を超度」¹⁰⁾している。この済度が三一教によるものなのか、僧と道主壇によるものなのか、記録はないが、その規模は黄仲昭や陳衷瑜の記した家族式の蘭盆大会よりもはるかに大きかったであろう。

黄仲昭の『八閩通志』は1489年に成立したが、陳衷瑜の三一教蘭盆科儀書は1609年に編纂されたものであり、その間には120年の差がある。その間に蘭盆会は禁止されたのだが、実際には中止されず、上記両書の記す家族式の蘭盆会は同じ流れを汲むものであった。したがって、黄仲昭の言う「盂蘭盆供」や三一教の蘭盆会は、明代の莆仙における蘭盆会の実情とかなり近いものがある。明代莆仙には家族蘭盆会だけでなく、大規模な蘭盆会やその他の超度儀式があったのである。

このような家族蘭盆会では目連戯が上演されたのだろうか？現在の風俗からすれば、それは大いに可能性がある。筆者は2000年5月13日に、ある一家がどのようにして目連戯を演じるにいたるのかという問題について、木偶師の許阿発氏(1929年生まれ、莆田市北岸忠門鎮坡尾村の出身。十四歳で祖父について学んだ。五代目の木偶師)に取材し、次のよ

うな回答を得た。家庭で演じられる目連戯には二種類あり、ひとつは親族が非業の死を遂げた場合、家ではどんなに貧しくとも目連戯を上演する。ふつうは死後一年でおこなう。中元、下元どちらでもよい。もうひとつは家族が「問陰」や、「探魂」をおこない、神から親族が地獄で苦しんでいることを告げられた時で、これまた目連戯を上演する。目連戯を上演するのはその経済条件によって決定され、経済的に余裕のある一家は独立して費用を負担するが、経済的に困難な家庭は同姓同族やいとこたちと共同で費用を負担して上演する。これを「大衆懺」、または「拝懺」と呼ぶ。拝懺はふつう和尚や経師（三一教）を呼ぶが、師公（道士）には依頼しない。拝懺では必ず目連戯が上演されるが、予算に限りがある場合は、一日だけの上演である。目連が済度するのはいずれも名も姓もある亡祖で、他家の者は托牒（超度に参加すること）はできず、無主游魂は超度しない。「大衆懺」は農村で盛んにおこなわれるが、それは費用を節約できるためである。許阿発氏の言う「大衆懺」は、黄仲昭の記した家族盂蘭盆会と経済的、構成的な点で共通する。家庭での拝懺で和尚を呼ぶことも盂蘭盆会の仏教的な特徴と合致し、黄仲昭の言う「僧に命じて族祠において修設する」と符合している。そして経師（三一教徒のうち、醮がおこなえる者）を呼び、師公を呼ばないのは、まさに三一教の蘭盆大会が仏教に偏向しているためである。つまり三一教の名を冠してはいるが、招くのは仏であって神仙ではなく、最後の般若船は西方浄土に向かうのであって天上界に昇るのではない。

明代初期の半ばごろ、莆仙の「故家世族」[代々官吏の一族]は「蘭盆供」を執りおこなった。莆仙においては、百年以上の「故家世族」であっても、その一家の歴史が悠久とはみなさないのが、蘭盆会は元代にまでさかのぼるだろう。宋代全期における莆仙での済度の流行と関係ありとするならば、盂蘭盆会が宋代に現れたと考えるのも不可能なことではない。唐代には、宮中で皇族による盂蘭盆が流行した。唐の代宗は

七月望日、宮中造盂蘭盆、綴飾鏤珮、設高祖以下七聖位、幡節衣冠皆具、各以帝号識其幡、自禁内分詣道仏祀

といった具合に盂蘭盆を催し、百官は「奉迎道従、歳以為常、群臣成風、皆言生死報応」¹¹⁾であったという。『仙溪志』の記載によれば、

上世唐神堯皇帝七世孫尚芬、居福建。天宝之難、敕於福建路召募宗室、尚芬率子弟戰勝、以功為奉天定難功臣。漢乾佑間、遷居仙游之汾陽¹²⁾。

李尚芬は皇族で、唐の代宗と同時代の人であり、仙遊に移り住んだ際に、確実に皇室の習俗をももたらしており、上が何かをおこなえば、「群臣成風」のさまを呈したのであろう。李尚芬が仙遊で祖先を祭るときに、皇族の蘭盆会を挙行了たということもありうることである。そして、この風習は民間にも伝播した。

莆仙地区には宋、元、明代に祭祀、超度が盛んにおこなわれたという歴史的な背景があるが、これが莆仙目連戯の発生に肥沃な土壌を提供したのである。

2. 「血盆経」から引き出された「戯中超度」

筆者は2001年1月2日から4日（旧暦11月26日から11月28日）にかけて、莆田県城廂区白雲庵において開光儀式と木偶目連戯の上演をみた。上演期間は三日で、昼間は目連戯を、夜は彩戯を上演する。荔珍木偶班による上演で、場所は庵門の右側である。これは白雲庵で仏像を作り直したことに由来する。すなわち仏祖の「開光」（開眼）をすることになり、功德を積み、目連戯を上演して亡魂を超度することにしたのである。また2001年11月24日（旧暦10月10日）に莆田県忠門鎮坡尾村でみた蘭盆会と木偶目連戯は、上演時間一日、万春班によるものである。場所は地蔵廟の近くで、毎年旧暦10月10日に蘭盆会を催し、目連戯を上演する。2001年11月25日（旧暦10月11日）莆田県黄石鎮清江村でみたものは、莆仙戯太陽昇劇団による目連戯で（人戯で、計三日だが、筆者がみたのは一日のみ）、場所は北極殿前の広場。これは清江村北極殿竣工を記念するために目連戯を演じたものである。2001年11月26日（旧暦10月12日）には仙遊楓亭鎮斗北村で十月十五日の大普度および木偶目連戯の上演をみた。場所は傾斜地にある万善爺廟の傍らで、期間は一日。詹建洪班による上演である。

上述の四回の目連戯の上演期日は、白雲庵の旧暦11月を除くと、その他はみな旧暦の10月15日より前におこなわれている。白雲庵の上演期日が庵主により決められたのは、仏祖の開眼供養があったため、やや特殊である。上演の理由としては、城廂白雲庵と清江北極殿は似ており、どちらも庵、殿で重大かつ盛大な行事があったために、功德を積み、衆生を超度するために、目連戯を上演したのである。しかし、坡尾、斗北村の目連戯は正常な普度（済度）のための上演に属するもので、毎年恒例のものとしておこなわれる。

次に、清江村太陽昇劇団の目連戯を主とし、他の三つの調査をも合わせて、「戯中超度」の内容と儀式を述べてみる。

(1) 「戲中超度」の物語と儀式

1. 『三殿告訴』の物語

道具：舞台左側に一獄門（枉死城をあらわす）、一血湖（血湖または血盆池地獄をあらわす）。

物語：劉四真は三殿に引立てられる。三殿は「血湖獄」とよばれ、鉄床、血湖の二つの刑がある。世間の女性は、出産の血で三光（日・月・星）をけがしたことにより、みなこの地獄に堕ちて責苦を受ける。獄官は三光をけがした罪で劉四真に刑を受けさせようとするが、四真は「十月懐胎，三年哺乳」を歌ってその苦しみを訴える。獄官はそれを憐れみ、刑を実行しない。目連が三殿に至ると、母はすでに解放されて次殿にいていた。目連は獄主に遇って、血湖獄のことを問う。

(生) 敢問獄主，血湖許多罪人其痛苦，丈夫之人亦受此苦報？

(獄) 此事不干丈夫之事。此是婦人生産，血水汚穢地神，將汚物往溪河洗濯，水流汚漫，善男信女，誤取水煎茶，供養諸聖。命終之時，該受此苦報。

(略)

(生唱) 【芙蓉令】 屈只（莆仙方言で、「至此」）那叫天，虧姐姐（莆仙戲特有の用語で、「母親」）（重句）養子受艱辛，分娩生産長仔身，咳！娘你艱辛！見此血湖，閻有八万四千余，許（莆仙方言で、「那」）獄卒打拷不循情，為子不能報本，咳！苦告於天！咳！苦告於天！

(略)

(生唱) 見血池紛紛人叫苦，眼淚淋淋，任鉄漢到此也傷悲，望我仏大慈大悲赦宥婦人只（莆仙方言で、「這」）罪苦，早脫幽冥。

(略)

(生) 敢問獄官，將何報答阿娘生産之恩？

(獄) 若有世上善男信女，持血盆齋三年十月，完滿解賽，盆中出五朶蓮花，更有般若船，載過奈河江岸，使罪人持血盆齋，可以超生。

(略)

(生) 敢問獄主，血湖中許多罪人，小憎超度再轉人身，獄主慈悲，乞行方便。

(獄) 但此惡人，前生共禪師有緣，今日方得超升，從命！

(生) 多謝我仏慈悲，弟子超度血湖許多罪人，望我仏如來接迎。汝等罪人，汝前生

失修，以致如此。我今解救汝等，可聽吾言，但婦人所行，可孝於予翁姑，可義於夫，待妯和順，視奴僕如己，終身向善，若再失修，万劫難逃。

(犯) 多謝禪師好人，感恩不淺。

(生唱) □子 (莆仙方言で、「死後の罪魂」) 所造諸惡業並 (重句)，皆由無始貪嗔痴。衆生無辺誓願 (重句)，煩惱無尽誓願斷。阿弥陀仏 (重句)。我今救脱血湖苦 (重句)，再三叮嚀汝原因，可孝翁姑敬夫主 (重句)，再失人身難又難！

(略)

(生唱) 血湖化作蓮池水 (重句)，五朶蓮花出現來，仗仏法力超生死 (重句)，世界修持莫胡行。

(生白) 弥陀佛阿弥陀佛。

2. 『三殿告訴』における済度儀式

上演はここでしばらく中止され、齋主はすでに亡くなった親族の超度に参加する。今回、超度された亡魂は104名、そのうち、戦死した将士は17名であった。今回は規模のやや大きい蘭盆大会であったために、家族蘭盆会とは異なり、戦死した将兵も超度された。北極殿の済度行事の責任者は超度の依頼者である齋主、つまりは亡魂に序列をつける (序列は納めた金額の多寡によって決められる)。齋主はそれぞれ一枚ずつ度牒を持ち、それに齋主の住所、姓名、超度する亡魂の姓名、生年月日と死亡年月日 (もし具体的な年月日がわからなければ、「吉年吉月吉日」と書く) および死亡原因を記入する。例えば「清江境靈慈廟青雲社齋主周志廉超亡兄周志揚、生70年6月6日、卒72年6月27日、溺水亡」のごとくである。

台上では、目連と一人の助手がいて、超度する順を示した表に従って度牒を読み上げてゆく。台の下では齋主が三生衣 (亡魂の服で、これにも序列番号がある) や、香などを持って列を作って待つ。番号が読まれると、齋主は三生衣を捧げ、十元のカネを渡し、替身 (出演者が亡魂の身代わりとなる) に紅包 [赤い紙に包んだ祝儀] を渡す。

超度の開始。「替身」は齋主の与えた三生衣を着て、死亡原因によって、獄門のなか、あるいは血湖のなかで待つ。齋主は舞台に向かって跪き、香を焚いて、亡魂の姓名を黙念する。目連は袈裟を掛け、口に密咒を唱え、手に錫杖を持ち (錫杖の上部には「招魂牌」が掛けてある)、地上に「破」の字や「佛」の字を書き、「×××亡魂出来、吾乃釈迦牟尼弟子、特来超度汝等、可聽吾一言、但婦人所行…… (詞句は先の芝居と同様。男性のときはいくらか修正される)」と言い、その後に錫杖を挙げる。「替身」は錫杖の先についた

「招魂幡」をつかみ、血湖や獄門から「超昇」される。そして、目連の前に跪くと、目連は前の芝居のごとくに曲を歌う。終わると、三生衣、度牒を齋主に返す。舞台の下の齋主は紙銭と三生衣を燃やす。そして亡魂を大筵に設けた位牌のところに導く。

今回、済度された104名のなかには、交通事故で亡くなった者、刀で斬られた者、服毒自殺した者、外地で亡くなった者、感電死した者、病没者、溺死者、出産の際に死んだ者などがいた。出産で亡くなった者、溺死者（男女の別なく）は血湖から出てくるが、その他はみな獄門（枉死城）から出てくる。坡尾村の蘭盆会の「戯中超度」では、男性は獄門から、また出産で死んだ女性や服毒死した女性、溺死した男子などは血湖から出た。血湖獄はやはり基本的に女性を主とした特殊な地獄である。

亡魂は大筵の位牌に導かれ、「安位」、「秬穢」、「沐浴」、「更衣」、「聴経」、「懺悔」などの儀式の後に般若船に乗って西天に往生する。

（２）「戯中超度」の物語の淵源

この物語の由来は内在的なものと外在的なものとに分けることができる。内在的なものとは唐宋の目連故事のなかにあるものだが、莆仙戯ではそれは直接に表現せず、一種の「原型」、一種の宗教思想ともよべるものである。外在的な物語とはその他のところから吸収してきて、そのまま芝居のなかで表現されたものである。

1. 内在的な物語

「世尊破獄度衆生」。なぜ「戯中超度」があるのか。物語から考えて、目連はたいへん大きな法力を持つので、女性を破獄超度させるのだろうか。獄主は絶大な権力を持つので、目連に罪人の赦免を許可するのだろうか。だが、これらはいずれも無理がある。超度に関することを莆仙人はたいへん重視していて、その風潮は宋代から始まっている。今日に至るまで、熱心な齋主は、非業の死を遂げた親族に対して、三年連続して済度儀式をおこなっている。楓亭鎮斗北村での普度目連戯では、目連が超度した後、齋主は杯茭〔後の字は草カンムリではなく竹カンムリ。二つ割にした瓢のような占具…訳註〕で神に伺いを立て、亡魂が超度されたかどうかを確かめる。しかし、莆仙人の目連戯にはなぜ「戯中超度」が在るのだろうか？筆者はこの儀式は唐代の変文『大目乾連冥間救母変文』（以下『目連救母変文』と略す）における物語、目連が母を救う途中に世尊が破獄し、衆生を超度するという物語からきているのではないかと考える。宋代の『仏説目連救母経』に至るまで、「世尊破獄」の物語は一貫してみられる¹³⁾。「世尊破獄度衆生」の物語は、貞明七（921）

年の『目連救母変文』から、宋代の『仏説目連救母経』に至るまで、この間、三百年余りの月日を経ていることとなり、この物語は「原型」であったと考えられる。「戯中超度」の源流はすなわちここにある。明代の鄭之珍の『目連救母善記』では「世尊破獄」の物語を省いている。文学芸術を主眼とした、あるいは鄭本の影響を受けた目連戯からは「世尊破獄」の物語は消え去っているのであるが、宗教的な役割に重点を置いた目連戯では、依然、この物語を保持している。しかし、莆仙戯においては、「如来破獄」、「超度衆生」は目連がその役割を担う。実は、目連戯が変化、発展する過程で、如来、地藏と目連の三者が次第に融合し、三位一体となり、同じものとなったのである。ここから、莆仙戯が宋代の目連故事や目連戯の系統に属し、鄭本とは異なる道筋をたどったことがわかる。

莆仙目連戯の「戯中超度」の宗教思想の根柢について、筆者は唐代の『目連救母変文』の「如来の聖旨はもとより均^{あまねく}平^{びやうどう}」、および「罪人^{おうじょう}生^{とく}天上」という仏教思想からきたものとする¹⁴⁾。注意すべきは、目連はもとインドの小乗仏教期の人物で、釈迦十大弟子の一人、阿羅漢の位を認められた者だということである。羅漢とは、「自覚」を意味し、小乗仏教では最高位である。『仏説盂蘭盆経』の目連はただ自分の母親を済度するのみであるが、唐、五代の目連故事では『仏説盂蘭盆経』を発展させ、目連の形象をより中国化させている。『目連縁起』には羅トが「転読大乘、不離昼夜」¹⁵⁾とあり、『目連救母変文』には羅トが「深信三宝、敬重大乗」、また「目連承仏明教……転読大乘經典」¹⁶⁾と書かれている。ここにはもと小乗の羅漢だった目連が大乘の菩薩としての目連に変わっていく姿がかいま見える。「菩薩、覚有情、度化一切衆生也」（菩薩は命有るものを感知し、一切の衆生を済度する）。変文における目連が阿鼻地獄に墮ちた母親のために苦悩し、衆鬼にたいして菩提心を起こすのは、「覚有情」のためである。そして「如来は本より大慈悲にして、地獄の惨状を聞いて眉を顰め（如来本は大慈悲、聞語惨地斂双眉）」、衆生を率いて阿鼻地獄を破り、「慈悲をもって地獄から衆生を救い（慈悲地獄救衆生）、罪人はみな天上に生まれ変わることができた（罪人総得生天上）」¹⁷⁾。これまた大乘思想である。宋代の『仏説目連救母経』には「転大乘經典」のことが三度現れ、さらに物語化されている。例えば、目連が獄主に母との面会を乞うと、獄主がその報恩を求めるので、目連が「請諸菩薩、転読大乘、報答獄主之恩」と答える場面、また如来も同じように破獄し、阿鼻地獄に墮ちた「一切の罪人を尽く昇天させた」¹⁸⁾。そこでの目連の形象の大乘化や大乘思想の宣揚は、変文よりもさらに一歩進んでいる。莆仙目連戯で目連自身が破獄し、「超度衆生」するのは、根柢のない捏造ではなく、唐、宋において目連の形象を大乘化した道筋に沿って発展したものである。鄭本での目連は地獄を足早に通り過ぎる「過客」にすぎず、衆生に対し

ては何ら菩提心を起こすことがない。「自覚」はしても「覚他」せず、ただ母親を救うだけで、衆生は超度しない。これは芸術化すると同時に大乘目連を小乗目連に書き変えていて、『目連救母変文』、『仏説目連救母経』や、莆仙戯の目連と比べると、宏大の思想に欠ける。目連は孝行心のために地獄を遍歴し、母親を救おうとする。そのこと自体は人を感動させるが、母親を救う前に獄を破り、衆生を超度する大乘思想はそれよりさらに気高いものである。そのため、民間にあつて、庶民はみな目連を菩薩とみなした。その信仰は菩薩信仰と同等であり、ついには「地獄未空、誓不成仏」と誓った地藏菩薩をも超えたのである。この他にも、鄭本では芸術化と同時に、唐宋の目連故事の宣揚した主題である大乘思想を改変したところがある。すなわち、目連が夜魔城を破った後、衆鬼は逃走するが、結局は「鐘馗がすべて夜魔城に収め入れた（一齊収入夜魔城去）」¹⁹⁾としている。ましてや「普度衆生」はなおさらである。これは上述の阿鼻獄を破り、罪人を「みな天に生まれるように解き放った（尽皆放生天）」行為とは大違いである。行同じからざれば、法また相異なれりである。目連救母が千年も色褪せることなく流行した理由は、大孝を宣揚したからであり、さらに「覚有情」、「度衆生」の広大な宗教思想において特に顕著なものがあつたからである。

2. 外在的な物語

『血盆経』。獄主と目連の対話は、莆仙目連戯独自の物語である。この物語は『仏説大蔵正教血盆経』²⁰⁾の内容とほとんど同じである。以下に挙げた『仏説大蔵正教血盆経』の問法者である目連と説法者である獄主の対話の比較を見ていただきたい。

莆仙目連戯『三殿告訴』

『仏説大蔵正教血盆経』

獄名	「血盆池」,「血湖」,「闊有八万四千余」	「血盆池獄, 闊八万四千由旬」
墮獄者	「婦人」,「不干丈夫事」	「女人」,「不干丈夫之事」
原因	「生産血水汚触地神」	「産下血露汚触地神」
問法	「將何報答阿娘生産之恩」	「將何報答產生阿娘之恩」
説法	「持血盆齋三年十月」 「転誦此経」	「持血盆齋三年, 仍結血盆勝会」, 「転誦此経」
功德	「盆中出五朵蓮花」,「般若缸載過奈河江岸」,「可以超生」	「般若船載過奈河江岸」,「五朵蓮花出現」,「便可超生仏地」

上の表からわかることは、『三殿告訴』の目連と獄主との対話は『仏説大蔵正教血盆経』の内容と完全に一致するということである。『仏説大蔵正教血盆経』は、およそ十世紀ごろに成立したものである²¹⁾。そこでは、女性が死後に血盆地獄に堕ちる原因は、ただひとつ、出産による穢れである。その後、仏教、道教でも多くの血（湖）経や懺が作られ、女性が地獄に堕ちる原因は「産汚」から月経、淋病、流産、服毒、さらには三綱五常に反した社会行為にまで拡大され、下獄の対象も女性から男性にまで広がった。上述の莆仙目連戯の『三殿告訴』に吸収されたものは北宋前後の『仏説大蔵正教血盆経』の内容であり、さらに、儀式的観点から見れば、血盆地（湖）獄は基本的にはやはり女性の地獄であり、後代の元、明、清の血盆（湖）経のように男女双方の獄ではない。

鄭本などの民間の目連戯が吸収した血盆経において、地獄に堕ちる原因はただ「産穢」のみである。そして、それにより獄官が刑を施そうとすると、劉氏は「血水汚穢、婦人之不得已（血で汚れるのは女性のやむを得ぬところ）」と弁駁するにいたる。獄官がさらに劉氏にその原因を説明させると、劉氏は「やむを得ぬ」「三大苦」を訴える。それは人びとに母親の産みの苦しみ、母親の無私天性と女性の運命の苦しさを感じさせるのに十分である。そして、獄主もまた感動して、刑を免じて次の殿に往かせる。しかしながら、話はここで終わってしまう。血盆経の半分の内容を吸収しただけで、血湖のなかの罪人は永劫にわたって済度されないのである。

莆仙目連戯はここから女性を救う方法を導き出す。すなわち血盆斎を実践し、血盆経を唱えれば、多くの女性たちは超度できるのである。母親は子供たちを生み育てる、その苦勞と功績は大きく、また出産の穢れもやむを得ぬことなのである。そうであれば、子供たる者は母親の恩に報いるべきであり（これは唐、五代の変文、講経などで一貫して宣揚された思想である）、彼女たちを超度するのもまた当然のことである。それゆえ、獄主は如来でも地蔵でも閻羅でもないものの、ここではひとりの「説法者」として、目連に対して彼女たちを超度すべきだというのである。莆仙目連戯は芝居のなかでは血盆経を利用して巧みに女性を超度する。一方、現実には「如来破獄」つまり罪人をも往生させる原初的な思想にもとづいてその他の亡魂も超度する。ただし、非業の死を遂げた者を男女の別なく超度するのは、血盆経の発展とはまた別のことに関係がある（後に詳しく論ずる）。目連は母親を救う前にその他の女性を超度する。「救う」のは自分の母親だけでなく、「天下の母」であり、「すべての罪人」である。以上、述べた通り、ここでの目連は「覚己」「覚他」した者、つまり「普度衆生」の大乗目連のすがたにほかならない。

あるいはここで問われるかもしれない、莆仙の人びとは、如来が阿鼻地獄を破って衆生

を超度するという物語を借りずに、なぜ、自分の親族を超度するのだろうか？そのこたえは、莆仙目連戯における目連は確かに血湖獄を破るのだが、そののち、再び獄を破ってはいないからである。しかし、これは主要な原因ではない。その深層の原因はやはり『血盆経』と関係がある。『血盆経』は目連救母の故事と『父母恩重講经文』に基づいて編まれたもので、その重点は「孝」—「報娘恩」（母の恩に報いる）の思想を宣揚することにある。莆仙の人びとが自分たちの親族を超度する心理から見ると、そのほとんどが「報恩還情」の心から非業の死を遂げた父母、夫妻、兄弟、姉妹などを超度している。白雲庵では、一人の若い嫁が姑を超度していた。彼女の言うところによれば、彼女は姑に会ったことはなかったが、夫からはいつも、寡婦であった姑が子供を育てるために苦勞し、血を吐いて死んだということを聞かされていて、彼女はその「報恩」のためにきたのである。また一人の二十歳過ぎの女性が、自分の弟を超度しにきていた。彼女は小さい頃に、弟と遊んでいたが、目を放したすきに、弟を溺れ死にさせてしまい、心に「後ろめたさ」があったからである。六十歳過ぎのおばあさんは自分の夫を超度しにきていた。彼女の夫は天秤棒を担いで商売をし、大変な苦勞をして家計を支えていたが、さらに儲けようと売り荷を重くしたために、路上に倒れ、二度と起き上がらなかった。その恩返しに来ていたのである。……これらの人びとは、生前なんら悪事は働かなかったが不幸であった。彼らは阿鼻地獄に堕ちて悪鬼、餓鬼になるはずはないと、少なくとも齋主たちはそう考えている。もし亡くなった親族が「悪鬼」となるとすれば、それは彼らにとってなによりも心理的に耐え難いことである。莆仙の人びとの「報恩還情」の超度心理と『血盆経』の「報娘恩」の思想は近いものがあり、このために、「如来破阿鼻地獄」が「目連破血湖獄」となったのである。

莆仙目連戯には鄭本やその他の地方の目連戯とは異なる「戯中超度」がある。そして、この「戯中超度」は『血盆経』の物語から直接に引き出されたものであり、その内在的な根拠は「罪人も往生を遂ぐべし」という大乘仏教の思想である。

3. 莆仙に流伝する『血盆経』とその目連戯への影響

莆仙目連戯が『仏説大蔵正教血盆経』の内容を吸収したということは、血盆経がかつて莆仙に流伝していたことをものがたる。筆者は現在までに、四種の血盆（湖）経、懺を収集した。以下、順に簡単に紹介する。

(1) 『三教血盆胎骨經』

『三教血盆胎骨經』（仙源書院藏）は、手抄本で、年代不明。実際には『血盆經』と『胎骨經』の二部に分けられる。原抄本の上の部には經名が記されていないが、下の部にはっきりと『仏説双親胎骨經』と題されている。これから類推すれば、上の部には『仏説血盆經』と題されていたであろうと考えられる。

『仏説血盆經』は『贊曰』から始まる。

大慈大悲愍衆生，大喜大舍齋含識。相好光明似自嚴，衆等志心服命礼。

さらに一文が続く。

蓋聞目連尊者，破獄尋娘，游遍十八地獄，救阿娘度母上天堂，逍遙快樂，孝順万古名揚。商無血盆会上仏菩薩摩訶薩。

經の本文の内容は『仏説大藏正教血盆經』と完全に同じで、ただ個々に文字の違いがあるばかりである。その差異は以下の通りである。（引用は原文のまま。以下同。）

『仏説血盆經』	『仏説大藏正教血盆經』
1. 一日三夜	一日二度
2. 將去溪河洗濯諸	將去溪河洗濯
3. 諸善男子取水煎茶	諸善男女取水煎茶
4. 便為阿娘持血盆齋（幾）年	更為阿娘持血盆齋三年
5. 請（夏門弟子，僧）轉誦此經	請僧轉誦此經
6. 心中慚愧	心生慚愧
7. 啓奉勸南閩浮提心，善男信女……	啓告米勸南閩浮提人，信善男女……

經文は「普贊」をもって締めくくられる。

目連尊者，救母昇天。血盆池内，化紅蓮花，演真言，最無辺，解脫塵縁，托生物利天。南無度人師菩薩摩訶薩。願以此功德，普及於一切。我等与衆生，皆共成仏道。

下の部に題された『仏説双親胎骨経』の内容は、父母の恩を宣揚するもので、以下、簡単に紹介する。

経は「如是我聞」（かくのごとく我聞けり）で始まり、仏が舍衛国祇樹孤独園で並み居る比丘たちに講経する場面が描かれる。阿難尊者が「合掌向仏」し、「世界のうちで、恩の最大のものは何ですか」と問うと、世尊は「世界のうちで、父母の恩が最大である」と答える。経は一問一答の形で展開してゆき、世尊は母親の十月懐胎の経過と辛苦を説明する。一月は「草頭の珠露」、「朝だけの命で、暮れにはなくなる」ようなものである。二月は「凝蘇」、「天中からの降雪、片片と零落する」ごときのものである。三月は「凝血」、あるいは「血山」、「積聚之血」となる。四月は「四肢が生じ」、「先ず両手、後に両脚が生じる」。五月は「五胞が生じる」、すなわち頭蓋骨、両肩、両膝蓋骨が生じる。六月は「六根が生じる」、すなわち眼、耳、鼻、舌、身、意が生じる。また「六賊」ともいう。七月は「七般肢骨ななとおりに生じる」。世尊、観音、羅漢、万聖帝王、朝臣や宰相、陣中の將軍、庶民の男女、それぞれに異なる手足をもって生まれる。「どの者にも三百六十骨節があり」、「男骨は頂門より生じ、女骨は脚板あしより生じる」。八月は「八般やくさの地獄を受ける」、たとえば「娘若飽時ほらのふくれたときは、石圧地獄と名づける」ごときのものである。九月は「三回転する」。一回転で「男左女右」、二回転で「両手拘母心」、三回転で「両脚ははは娘の腰胯を踏む」。そして母親に「四肢が酸疼ひどくうずき、百節ひゃくせつが拘解ふしごしけるほどの思いを与える。十月は「臨産の時」、母親は「四般よっさの悪生」を恐れ、「家家驚惧、命与児分」する。最後に世尊はこう発願する。もし信善男女があって、「この経を持写し、普く十方に勧め、広く孝道を行い、俱に衆僧を養えば、父母は現世康寧にして、没後は仏地に生まれることだろう」と。

この『仏説双親胎骨経』と『仏説血盆経』は姉妹篇であるが、『仏説血盆経』と同時期の北宋前後に作られた偽経であるか否かは、なお進んだ研究が待たれる。

『血盆胎骨経』は、事実上、仏教の經典である。筆者の調査によると、一般家庭での拝懺（父母の追善供養）の時、必ずこの経を唱える。三一教でもこの経を用い、家族盂蘭盆会（すなわち「大衆懺」）の時には、やはり、この二つの經典を必ず唱える。これは大規模な超度儀式でも、必ず唱えるもので、例えば「転藏」においては、亡魂を地獄から超度するにあたり、『三教薦修轉藏儀文』を読むが、そこに、「入壇の時には誦んで普く召し、引魂帰位させる。即ち胎骨経一部を誦んで安位させる」と注記されている。莆仙の風俗では、拝懺の時に、もし父母が「非業の死」を遂げたのであれば、かならず目連戯を演じる。長い年月を経て、目連故事はまたあらゆる家庭に伝わり、一方、父母の恩に報いる思想もまた深く人びとの心に定着した。

(2) 『血盆經』

この經は仙游県蔡坑尼姑庵より出たもので、正統な仏教寺院のものではない。手抄本で、年代不明。計219句の七言詩で構成される。以下はその主要な内容である。

1-6句：「善男信女聽原因，聽念血盆大藏經。……業鏡台前凭簿照，厘毫罪惡自家當。」『大藏血盆經』の名があり、『仏説大藏正教血盆經』との密接な関係がうかがわれる。

7-12句：「目連尊者貌堂堂，身穿袈裟去尋娘……十八地獄都游尽，不見娘親好？惶。」目連が袈裟を掛け、鉢を持ち、錫杖で地獄の門をたたいて母親を尋ねる場面が描かれる（これは内容の倒置された「目連救母」を示している）。

13-22句：「目連尊者実有心……挑枷帶鎖不離身。」「目連尊者到羽州，看見血池万丈深，」池中婦女人無數」の情景が描かれる。枷をはめ、鎖に繋がれ、鬼卒、牛頭や馬頭に一日中打ち据えられており、その悲惨さを見るにしのびがたい。

23-84句：「目連尊者問原因，這樣婦女罪何因？……食齋受戒三年後，免娘墮落血池中。」目連は獄官に問い、獄官は目連に答える。この獄は女性の地獄である。現世で子供を生み育て、「三光とともに神明を汚し（触穢三光共神明）」、汚れた服を溪河で洗い、「凡眼のため清水の汚れを知らずに、その水で茶を入れて仏前に供えた」ために、將軍がその名を善惡簿に記し、命尽きればこの地獄に落とされ、この苦しい報いを受ける。獄官は世間の人びとに三法を敬い、血盆齋を三年つづければ、母親が血池に墮ちるのは避けられるということを説き勧める。

85-148句：「一拜謝娘養育恩，二拜謝娘懷胎恩……若要兒孫孝順我，我今先孝二双親。」この内容は唐・五代変文の『父母恩重講經文』と似ている。

149-218句：「目連大師去尋娘，見了血池苦一場……持齋戒殺報娘奶，日日虔誠礼血盆。」ここで再び、血池中の女性たちの報いを受ける惨状を目連が見るところが描かれる。「血湖池中無男子，沿河兩岸是女人，」銅蛇鉄犬咬横身，飢餓吃了血塊子」。そして世間の人びとに母に替わってこの真經を日夜唱え、血池のなかにいる母親を救い出すことを勧める。

この經典は次の五点にまとめることができる。問法者は目連，答法者は獄主ということ。女性は産穢のために血盆地獄に墮ちること。血盆地獄は女性のみ地獄であること。それ

女性の救拔

を救う方法は血盆齋を三年おこない、この経を唱えつづけること。母の恩に報いるという思想が強調されていることである。これらのことと『仏説大蔵正教血盆経』、莆抄本『仏説血盆経』の内容とは類似している。さらに、目連救母故事の簡単な物語をも吸収していて、これは血盆経の「普及本」といえる。韻文で構成され、善男信女がいつでも唱えられるようになっている。建陽白砂郷高腔木偶の老芸人の瑞倫氏（芸名は光頭佬）は上杭太抜の尼庵において『目連嘆苦詞』、『目連救母恩情事』、『血盆経』などの目連（または目連戯からのもの）に関する唱段を手抄し、唱本を編集し、新たに高腔曲牌とし、それを農閑期に演唱した。²²⁾ そのなかの『目連嘆苦詞』は、内容と文章が莆抄本『血盆経』とだいたい同じである。この『血盆経』は筆者の母方の叔母が庵で転写してきたものである。彼女は敬虔な仏教信徒であったので、ほとんど毎日この経を読み上げていた。莆仙では、七十歳前後の女性は、ふつうみなこの経を唱えることができる。昔は大部分の女性がこの経を読むことができたであろうと思われる。そして、目連戯はいつも上演されていたわけでは無いが、この経が広く読まれていたために、女性や子供でもみな知っていたのである。

（3）『慈悲血盆宝経』

『慈悲血盆宝経』（三教新徳書院蔵。以下『血盆宝経』と略す）は、手抄本で、年代不明。以下、この経典と「血盆経」にかかわる内容について簡単な紹介を加える。

1. 女性が血湖獄に墮ちる原因

この経典は、元始天尊が十方救苦天尊を遣わして九幽地獄に苦しむ衆生を救ったことを記す。救苦天尊は北陰酆都大鉄圍山の南にある無間硤石に至る。そこには血湖獄があり、「天下の女性の罪人が収容され（収禁天下世間婦女罪人）」、さまざまな拷問を受け、「自然に汚れた血を飲まされている」。そこで、救苦天尊は血湖の主に問う。

世間の丈夫男子の受苦はみえず、皆これ限りなく女子婦人の受罪である、なぜこの苦報を受けるのか？

獄主は答えてこう言った。「それは男子とはかかわりのないこと、世間の女性はみな子供を生み育てる時に、地神を血で汚している」、また汚れた衣服を洗濯する時に、天真地聖を汚し、三光を冒すからだ。

簡潔に言うならば、地獄に墮ちる原因は産穢であり、血湖獄は女性の地獄である。この

点は、『血盆経』と同じである。ただ問法者は目連ではなく、救苦天尊に改められている。とはいえ、獄主は答えないので、救苦天尊は天宮に戻って元始天尊に求法する。

2. 女性を救う法

救苦天尊は三元宮に戻り、元始天尊に血湖地獄の惨状を訴える。「母の産育の恩に報いるため」に、超度の法の教えを請う。元始天尊はそこでこの経を説く。内容は以下のとおりである。

A. 世間の女性は妊娠して、出産に及ぶ時、善果を修めず、三世（前世、現世、来世）に渡って冤が絡みつく、また分娩することが冤となるので、死んだ後に血湖に墮ちる。もし親孝行な男女が亡き母を超度しようとしたとき、訴えるところがなければ、靈宝大法司がまず符吏を遣って血屍女魂符令を持たせ、血の汚れを洗い除き、血湖を変えれば、赦される。

B. 玉籙を出し、血湖を大赦する。その後にこの経を唱え、玉籙教文を修め、齋醮をおこなえば、そのときはじめて血湖獄主、五道將軍は女性の魂を地獄から釈放することができる。

C. 女性の魂は地獄を離れると、天医に産疾を治療するように請い、全身が癒えた後に、沐浴する。その後、朝真、受食、受戒、煉形、易質の過程をたどり、南宮に超度される。

D. もし女性が産む前に死んでしまった場合は、天医に催生大将を遣わすよう請い、出産を促してもらい、そして後に沐浴が許される。産んだ子が死んでしまった場合は、母子ともに煉化超度される。

E. 世の女性は自分で自分を救うことができる。世間の善男信女は、母親を孝行し、母の出産の恩を感謝し、齋を催し、道を奉じ、靈宝救苦血湖真経を一万遍転読し、齋醮を修め、その冤罪を雪がねばならない。そうしてはじめて「婦道が昌隆となり、女儀が清く吉くなる」。つまり、現世での福寿延長が望め、死んでも三途血湖に行くことはなく、奈河において超度されるのである。

『仏説大蔵正教血盆経』ではただ「産穢」について述べるだけで、「産亡」には触れていない。つまり、産んでから死ぬことと産む前に死ぬことを区別しないが、この經典では細かく分類される。注意すべきは、この經典では女性の出産による死亡が宿世（前世）の

冤となるとしていることである。

3. 元始天尊の発願

元始天尊の発願したことの形式と内容は、『仏説大蔵正教血盆經』と似ている。その救い出す対象は三世の母親、早逝した母親であり、『血盆經』と同じである。

上述した三点から見ると、この『慈悲血盆宝懺』は『血盆經』を模倣したものであることがわかる。形式の上から見ても、『血盆經』は問法者目連、説法者獄主であるが、この經では目連が道教の救苦天尊に改められ、また説法者は『仏説大蔵正教血盆經』に由来する一人の獄主が獄主と元始天尊とに分けられたにすぎない。内容の上から『慈悲血盆宝懺』を見ると、これはより簡単にした『血盆經』なのである。つまり女性は「産穢」のために地獄に墮ちるのだが、ただ重要なことは、産亡の女性たちについて、出産の際に亡くなったのか、それとも産後、または妊娠中に亡くなったのかを分けていること、そして血湖獄を女性の地獄としていることである。それは「孝」を宣揚すると同時に、母子の関係を「世冤相纏」に帰結させる。三一教の經師の言によると、人びとの家で産亡の女性を追善供養する時には、多くこの經を唱えるという。

(4) 『慈悲血盆宝懺』

『慈悲血盆宝懺』（『血盆宝懺』と略す）は「禪門弟子達祥」の手によって成立したもので、仏教の宝懺である。手抄本で、抄写されたのは1945年夏。この懺は寺院にはなく、民間に流伝したものである。書は上、中、下三巻に分かれ、その内容は目連問法、世尊説法、衆人懺悔のかたちで述べられている。懺悔の対象は男女を区別しないが、かなりの部分が『血盆經』の内容とかかわる。以下、そのかかわりのある部分を概説する。

1. 上巻のはじめにある文言

一切諸仏憫念衆生、為説血盆妙懺道場。爾時目連大士乃因南閻浮提一切衆生不知因果、造諸惡業而墮惡道、為是因縁、而白仏言。世尊告目連言、此等衆生、今当正教、皆因業力之所生也。先言男子、次説女人。

2. 懺文には、特に女性の身体には「五障」、「六根」があることを挙げ、「五欲」を引き起こし、はかり知れない罪を造るとある。女性は「半月流不浄水」、「動其復動、惱其

婦人」である。目連が仏に問うと、仏は

皆由過去世中障蔽仏法，不樂經書，多貪財宝，心生慳吝，互相嫉妬，兩舌惡口，謗訕良善，毒心無厭。

と答える。この因縁や、はかり知れない罪により、死後に雀鴿鴛鴦の報いを受けるという。

此等女人，向虛空中清淨界内，或造塔寺，装画仏像，建立道場，燒衆妙香，諸油灯，張設幡蓋，供養三宝，洗心滌慮，救哀懺悔，無始業障方得消除。

3. 中巻は「六環金錫仏伝来，直入閻羅業鏡台。振劫獄門開徹後，血盆化作蓮花池。」という一文で始まる。それと同様に世尊が血盆懺法を説くと、目連は道について問い始める。仏は外身，内身，内外身から説き始め，この「三色」には「生処不浄，種不浄，生相不浄，心性不浄，究竟不浄」の「五種の不浄」があると言う。「生性不浄」とは「産汚」の意味も含んでいる。そして女性たちは懺悔する。懺文には

諸女人等遇産生時，汲於井水，或臨河或向池洗浣衣服，或洗身体，血水漫流，散陰在地，脈流泉井。取水煮茗，供諸仏聖，中有不浄，成乎褻瀆，神人嫌穢。善惡部官，札記姓字，待人命終，獄卒惡鬼，捏大鉄叉，刺烈心腹，鉄鈎擊口，澆灌臭膿惡血，復以銅汁鉄丸止渴，塞飢，咽喉肺腹靡不焦爛，一日一夜万死万生，筋脈骨髓痛苦無伸。

とある。

4. 下巻の主要な内容は懺悔帰依である。はじめの句には「一切男女は」とあり，次のように述べられる。もし淘洗落米，弁齋不浄，裝飾華靡，搽抹脂粉，傷殺虫蟻，不信仏法，不孝父母，不敬天地，兩舌傷人，謗人謗三宝，飲食無度，好食血肉，言地獄無者，好打衆生，人の造像写經の障^{さまた}げなどの行為をすれば，みな地獄に陥るだろうという。その地獄とは阿鼻地獄，黑暗雄獄，血湖地獄，飲血地獄など，すべて43個の無辺地獄のことである。特に「非毀大乘，謗破三宝」した者は，阿鼻地獄に墮ち，「千万億劫ものあいだ，解脱できない」という。懺悔帰依の後には，地獄を遠く離れることができ，障碍を取り除き，「度脱一切有情，同成正覚」となる。

『慈悲血盆宝懺』は仏教の経懺であり、主に「五障」、「六賊」や業報思想を消滅させることを宣言しており、相手は衆生であって、女性だけというわけではないが、その大部分の内容は女性に対してのものである。注目されるのは、「五種不浄」のなかで女性の月経の血が不浄なことを挙げ、さらにその詳しい記述があることである。その他、この懺においてはまた女性の血湖獄に堕ちる原因を広げていて、たとえば、上述の「弁斎不浄」、「両舌傷人」などがそれである。上述の『血盆胎骨経』、『血盆経』、『慈悲血盆宝経』と比べ、異なる部分は、前の三経が女性専門の経典であるのに対して、この懺は男女の別がないことである。女性が地獄に堕ちる原因の複雑化、懺悔に男女の別がないことなどから考えると、この懺は比較的遅い年代に出現したものであろう。

以上、三冊の経典と一冊の懺が前後して莆仙の民間に流伝していた。実際には、『血盆胎骨経』は仏教、『血盆宝経』は道教であるが、いずれも三一教に吸収されている。甚だしくは原本のまま取り込まれている。『血盆経』は『仏説大蔵正教血盆経』の「普及本」であり、それらは多かれ少なかれ、目連の孝行、救母の物語と関係がある。特に『血盆胎骨経』と『血盆経』は、目連の物語や目連戯の影響力を広げた。すなわち、これらにより、目連戯はどの家でも、また女性や子供でも知る、日常的なものとなったのである。

4. 『血盆経』の変化から推測した目連戯の『血盆経』受容年代

目連戯における血盆経の受容については、血盆経の発展の歴史的段階と結びつけて考えなければならない。

(1) 血盆経の生まれた年代：北宋前後

『仏説大蔵正教血盆経』が生まれた年代は、唐、五代の目連故事や『父母恩重講経文』などの類いの俗講と結び付けて考察すべきである。敦煌変文の『目連救母変文』、『目連縁起』、『目連変文』においては、目連の母親の地獄に落ちる原因が特殊なものであり、そのため目連の孝もまた特殊な性格を持ち、そこから、普遍性を持った教育や三法を敬うという効果を得るのはむずかしい。もし母に罪がなければ、地獄には堕ちることはないであり、母を救う必要もない。一方、『父母恩重講経文』は父母を同時に扱っているが、重点が置かれているのは母親、特にその「十月懐胎、三年哺乳」の辛苦に対してである。『父母恩重講経文』には次のようにある。

懐胎十月事堪哀，苦惱千般不可裁，念仏求神希救護。焚香發願乞無災。專憂煞鬼相追捉，怕被無常一念催；經說母親臨產月，受沒量多苦惱也唱將來。經月滿生時，受諸痛苦，須與好惡，只怒（恐）無常，如煞猪羊，血流洒地。此唱經文，明產相貌也²³⁾。

ここでは、子供たちに母親が出産の時に受ける非常に大きな苦痛、時には生命までも代価としてはらわなければならないことを理解させようとする。そして、また母親の偉大な天性を褒め称え、人びとをして母親には孝順たるようにさせようとする。また『仏説大藏正教血盆經』は、父母の「恩重」に続き、特に母親の産育の恩に触れる。そして、目連の母親が地獄に墮ちたのは特殊な原因によるのではなく、女性の普遍的な生理現象である「産血」によると改めている。すなわち、その血こそが神明を冒瀆した原罪であると説き、ことさらに血盆池地獄をつくり出したのである。こうして、母親はすべて血盆池地獄に墮ちねばならなくなる。一方、母親が子供を育てたことの恩は山のように重い。そうすると、天下の子供はすべて目連のように母親に孝を尽くし、母親を血盆地獄から救い出さなければならない。これは普遍的な意義を持つのであり、天下の人びとはみな母親に対して孝行を尽くし、三宝を敬わなければならない。ここから考えると、『血盆經』の生まれたのは、唐・五代の目連故事や、講經文の発生からそう遠くない年代といえるだろう。

道教の血湖經の初出は、管見の限りでは、寧全真（1101-1181）が王契真（北宋末の人）に編集させた『上清靈宝大法』である。その第43卷『血湖救符章』には次のようにある。

師曰、按靈宝玉籙謂大小鉄冢山、赦亦能到。惟硤石之獄、其形皆黑、傍有火焰、下有血湖。在大鉄冢山之南処、東南一大石間、上大下尖、中間開一縫、罪人出入、自有百藥毒汁灌身心。総名血湖獄、專囚産死婦人、億劫不賭光明。獄中有百万鬼卒、昼夜拷掠罪人、曰翻体大神、擲屍大神、食心啖腦鬼王等。其中穢汚苦楚、実可哀憐。若有似此之魂、宜以別法追度、乃太上垂教專救産之苦者、与其它法不同、惟在遵行、其功莫測。²⁴⁾

寧全真にはじまり、林靈真（1239-1302）に伝わり、編集された『靈宝領教济度金書』²⁵⁾のなかには、「道場陳設図（血湖道場専用）」、『血湖道場一日節目』、『宣血湖符』などがあり、その第150卷『元皇開度天尊引詣血湖獄焚慧光符』には、

謹按經云、大鉄冢山硤石地獄極北之地、又有一獄、積血成湖、号曰血湖。世間婦女

因産亡身，魂墮其中，腥波飛濺而浩渺無涯，穢浪飄流而杳冥莫測。

と記されている。

寧全真是靈寶東華派の創始者で、北宋から南宋にかかる時期に生存した。王契真是北宋の道士、王靈宝（茂端）の実弟で、当時、人びとからは「小靈宝」とよばれた。北宋末の人である。この両者の記したものは信のおけるもので、とりわけそこで、血湖経は専ら産婦を苦しみから救うためのものであると指摘していることで他と異なっている。これは、北宋期にすでに『血湖経』が存在したと、そして、その内容は女性が産亡ののちに血湖獄に墮ちるといふものであったことをものがたっている。林靈真の『靈宝領教濟度金書』は元、明の道教において増補されたが、ただ、女性が出産でなくなり血湖獄に墮ちるといふのはやはり北宋時代にいわれたものだというべきである。林靈真は「婦女、産亡により」血湖獄に墮ちるといふのは「謹按経云（経典に基づいていうのだ）」と言っており、その地獄に墮ちる原因と北宋の王契真の述べていることは一致する。また南宋の金允中の編んだ『上清靈宝大法』は源流を明らかにし、南北道教派の教義や科儀が偽りのものであることを厳しく指摘し、その巻37『鄮都山真形』でこう述べている。

若硖石血湖之説，專以恐脅生産之家出錢薦拔而為之，其謬妄不待吉。

これもまた道教の原初の血湖経は、産婦が血湖獄に墮ちるといふものであったことを反証している。

このことから、道教の血盆経が生まれた年代は北宋だということ、そして現在は具体的な内容をうかがい知ることはできないが、上述の記載によれば、最初の血盆経もまた比較的簡単なもので、単に女性が出産で亡くなり、その魂が血湖地獄に墮ちるといふものであったことがわかる。『仏説大蔵正教血盆経』と比べると、三点で異なる。第一に、その獄名は血湖獄であるが、仏教では血盆地獄である（共通点は血盆地獄、血湖獄ともに女性専用の地獄であることである）。第二に、女性が血湖獄に墮ちる原因に「産亡」が加えられている。仏教の血盆経ではあらゆる産婦が「産穢」のために死後、血盆地獄に墮ちるとされるが、道教の血盆経では「産亡」にその重点がある。第三に、仏教では「孝」、母親の超度、三法を敬うことを宣揚することに普遍的な意義を持たせる。一方、道教では産亡の女性を超度するだけであり、必ずしも子の「孝」を強調していない。それは母子の関係を「宿世冤結」に帰結させているからで、ここでは「孝」の意味もあるとはいえ、最終

的には「解冤釈結」に落ち着く。ところが、『仏説大藏正教血盆經』では、もっぱら「孝順男女」に血盆經を唱え、筆写させるが、そうすることにより「三世母親」をすべて往生させることができ、それは畢竟、「孝」に行き着くのである。

(2) 血盆(湖)經の發展期：南宋，元代

道教にはさらに『元始天尊濟度血湖真經』(『血湖真經』)²⁶⁾と『太一救苦天尊說拔血湖宝懺』(『血湖宝懺』)²⁷⁾がある。

『血湖真經』の内容はすでに複雑なものとなっているが、その要点は次の三点である。

1. 男女はみな血湖獄に墮ちる。「凡有下界衆生男子女人在世之時或遭王法横惡，所加兵刑刳戮，牢獄枷鎖，癰疽癩毒，膿血淋漓，人所棄擲，求生不得，求死不得，憂惱自前，無由解脫，罪業欲重，復墮血湖，求無出期。」
2. 女性が血湖獄に墮ちる原因として「月水流行」，「服毒藥損子墮胎」，「男女数多故行溺死」，「子死腹中」，「母亡産後」，「母子俱亡」などを加えた。
3. 孝道は消え，業報が強調される。「凡世間産死血屍女人，皆是宿世母了仇讎，冤家纏害，乃至今生一一還報。」

『血湖真經』の最後の「頌」は、莆抄本『血盆宝經』の「頌」と文章がだいたい似ている。ただ前者の「玉籙大赦諸罪魂」，後者の「玉籙大赦諸女魂」は一文字の違いだが，超度の対象は異なっている。前者の対象は「衆男女罪魂」であるが，後者は「産婦」である。血盆經の発生，發展の歴史から考えると，『血湖真經』の「諸罪魂」の大赦は，莆抄本『血盆宝經』の「諸女魂」の後に位置づけるべきものである。

『血湖宝懺』の内容はさらに複雑である。

1. 血湖のなかには女性だけではなく，「一切血死之衆」もあり，『血盆宝經』の死魂のほか，「戦死陣没した男性の魂」，「残虐な殺人を犯した衆」，「強盜の徒」などが加えられている。
2. 女性が血湖獄に墮ちる原因は，上述のものほかに，女性の「崩漏」，「淋瀝」などの病気がある。懺文の箇所には多くの日常的なこと，「不淨手漱口念經」，「不信陰陽」，「己是他非説長短」，「呵風罵雨惡寒厭暑」，「洗米澄泔淘沙落粒」，「厭賤谷米蔬菜」，「剪裁弊帛任意衣着」，「熱湯潑地損害一切虫蟻」，「輕凌翁姑父母伯叔

兄弟」などが墮獄の原因として付け加えられている。

3. 女性の「産亡」、死亡の分類は、『血湖宝懺』と比べ、より詳細である。

4. やはりここでも孝道が消えており、「夙生冤対受報」ということが際だつ。

この経と懺の発生日代について、研究者のなかには宋、元代とみなす者もいる。²⁸⁾しかし、内容の複雑さ、分類の細分化、編幅の冗長さ、経懺の格式の成熟具合（『血湖真経』が「霊書」として現れ、「救抜梵炁隠語」であったこと。また『血湖宝懺』には、崇敬されるものとして天尊、大帝、真人、天師など計139もの称号がみられること）などの点から考えると、南宋後の産物とすべきである。

（3）血盆（湖）経の最盛期：明、清代

明清時代には、「血盆経」、「血湖経」、「血盆懺」などが民間に広く伝わっていた。加えて明代には理学が流行し、女性への束縛がさらに厳しくなって、女性の地位は日に日に低下した。変文にあった「劳苦恩重」の母親像はみられなくなり、女性の月経や「産穢」だけではなく、女性の身体までもが不浄とみなされるようになった。仏教は「業」を宣揚し、女性の身体は前世の業によって報いを受けているので、現世で三宝を敬い、善をおこなえば、来世において女性に生まれることはないと言く。道教では女性の現世での「産亡」は、前世の「冤仇」の帰結であり、その超度は「孝」のためではなく、その解冤のためであるということを宣揚する。同時に、明代に理学が流行したため、地獄に墮ちる、あるいは女性に生まれることの主な原因として前世の「不忠不孝不仁不義不信」があげられた。つまり、三綱五常の内容が因果応報のなかに浸透したのである。後代になればなるほど、血湖、血池に墮ちる原因は次第により厳しく、より瑣末になってゆき、身動きが取れなくなり、ちょっとした不注意で、血湖や、血盆地獄に墮ちるようになってしまった。『玉歴抄伝』にある血汚池の記載は驚くべきもので、女性の「産穢」は、その家長にも及んでいる。女性がもし産後二十日を待たず、神仏のいるところを通ったり、洗濯物を高い所に干したりしたら、それは神仏を穢したことになり、その罪の割合は家長三分、本人七分であるという。禁じられた日である五月十四、十五夜、八月三日、十月十日にもしも男女が交われば、これも禁を犯したことになり、神明を冒瀆したことになる。死後、まず、他の地獄に墮ちるのはいうまでもなく、最後には血池にも墮ちて苦しむ。また、もしも男女が殺生をし、血肉を食らうことを好むなら、その血は神仏の堂、経書、さらにはその祭器までも穢すことになり、死後、やはり諸地獄と血池で二重の苦しい報いを受けなければならない。血

湖、血池獄は世間の男女が死後に必ず墮ちる最も暗く、残酷で、最も超度しがたい地獄となったのである。

上述の四種の莆仙地区に伝わる血盆（湖）経、懺、は手抄本であるため、いつ莆仙地区に伝わったか具体的な年代を断定するすべはない。とはいえ、関連文献からその歴史的な来源は推測することが可能である。莆仙戯手抄本『血盆（湖）経』と、その関連する歴史的文献との比較は次の表の通りである（次頁参照）。

莆抄本『仏説血盆経』の文章と内容は、同時期に作られた『仏説大蔵正教血盆経』とは同じである。『血盆経』は七言の韻文とはいえ、その構成要素は『仏説大蔵正教血盆経』と同じであり、この二経が発生期の血盆経に属することは疑いない。『血盆宝懺』は、北宋道教の血湖経と構成要素が同じで、これも発生期の血湖経に属す。『血湖宝懺』は南宋、元代の道教の血湖経と類似しており、発展期の産物である。

目連戯における血盆経の受容については、目連戯、血盆経それぞれの発展と相互の状況を考慮しなければならない。初期の血盆経は北宋前後に生まれているが、北宋ではまた『目連救母』雑劇が登場した。北宋の目連雑劇については、文献が乏しく、目下、その具体的な内容は不明だが、目連戯の発展史上、初期の段階であったと考えられる。初期の血盆経の状況では、「産穢」、「産亡」の女性を超度するだけであった。両者はともに初期段階に属していて、さらに発展と影響の拡大を経たのちに、初めて交渉を持ったと思われる。したがって当時の目連戯が血盆経を吸収した可能性は余りない。南宋に至り、血盆経には一大変化が生じる。すなわち血湖獄に男女の別が消え、ことごとく超度することができるようになったのである。だが、現存の『仏説目連救母経』には「判確地獄」、「剣樹地獄」、「石磕地獄」、「餓鬼地獄」、「灰河地獄」、「鑊湯地獄」、「火盆地獄」、「阿鼻地獄」、「小黑闇地獄」などの地獄はあるが、血湖地獄はない。『仏説目連救母経』は偽経であり、戯曲ではない。そして、孤立した資料なので、当時の演劇が血盆経を吸収していなかったかどうかを完全に判定することはできない。明の鄭之珍の『目連救母勸善記・三殿尋母』に現れる血湖は、明の万暦（1573-1620）以前に、民間の目連戯が血盆経の内容を吸収していたことを物語っている。

明代には血盆経と儒教の理学が並びおこなわれ、女性に対する束縛は日増しに厳しいものとなり、さらに多くの「三綱五常」の「天理」が加えられた。「天理」に背くことはできず、「天理」に背いた女性が血湖獄に墮ちるのは当然のこととされた。したがって鄭本の劉氏真是女性の「産穢」を「不得已（やむなきこと）」として血湖の獄官に反駁し、獄

女性の救抜

版本	序号	経書名	年代	同法者		説経者			地獄名		獄中魂			地獄に落ちた原因				超抜の対象			超抜方式	儒道釈思想		
				目連	救苦天尊	その他	獄主	世尊	元始天尊	その他	血盆地	血湖	母親	出産で死んだ女性	その他の男女	産穉	産亡	月経	病	その他			母親	出産で死んだ女性
歴代文献	1	正教血盆経 仏説大蔵	北宋前後	+			+			+			+						+			この経を誦する	孝、礼三宝	
	2	《上清靈宝大法》 之《血湖赦符章》	北宋											+	+				+	+			宿世冤結、礼三清	
	3	元始天尊濟 度血湖真経	宋元		+					+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	この経を誦する	宿命根源、礼三清
	4	太一救苦天尊 拔度血湖宝懺	宋元			妙行真人				救苦天尊				+	+	+	+	+	+	+	+	+	懺悔、この経を誦する	夙世冤対、礼三清
莆仙抄本	5	血盆経 仏説	不明	+			+			+			+						+			血盆齋を行 いこの経を 誦する	孝、礼三宝	
	6	血盆経	不明	+			+			+			+						+			血盆齋を行 いこの経を誦 する	孝、礼三宝	
	7	血湖 宝経	不明		+		+			+	+	+	+	+	+				+	+		齋を行 いこの経を誦 する	孝、宿世、 礼三宝、 皈依天尊	
	8	血湖 宝懺	不明	+				+		+			+	+	+	+			+	+		懺悔	業力果報、 礼三宝	

官も「不得已」として認める。とはいえ、

違誓開葦，是可已而不可已。陰司法度，身有惡血，不以為汚，心有惡血，深為可惡²⁹⁾

このために、劉氏に刑を実施しようとする。実際に、仏教の戒律からすれば、「開葦」は決して重罪ではない。しかし、夫のいいつけを守らずに背いたことは「三綱五常」を犯したことであり、それがすなわち「心有惡血」であり、十惡不赦の重罪なのである³⁰⁾。劉氏が地獄に墮ちたのは決して早期血盆経のいう生理的な原因によるのではなく、倫理的な重罪によるのであり、「血盆齋を保持すること」、つまり「血盆経」を誦することだけで地獄から超度することはできない。このゆえに、鄭之珍は改編の際に、早期血盆経の後半部分の女性超度の部分を削除したのである。こう考えると、目連戯が明代の血盆経の最盛期に血盆経の内容を吸収することはとうていあり得ない。仮に、仏教、道教においては受容し得たとしても、理学は血盆経を容認することはできず、そのため、すでに吸収していた血盆経を削除するよりほかなかったのである。

目連戯が血盆経の発生期である北宋時代に血盆経を吸収した可能性は少ない。しかし、最盛期にはかえって血盆経の内容が削除されている。ということは、目連戯が血盆経を受容したのは血盆経の発展期にあたる、南宋末から元代までの間ということになる。

莆仙目連戯は早期血盆経の内容を吸収して、実際の超度の対象を拡大させた。これはなぜなのだろうか？ こうした状況が発生したのは、おそらく莆仙目連戯が二段階に分かれて血盆経の内容を吸収していったからであろう。南宋から元にかけて、目連故事や目連戯が広く伝播してゆくに従い、「目連行孝」の思想はより深く人びとの心に浸透していった。そしてまた、「如来破獄」、すなわち「普渡衆生」の思想がより定型化していった。この時、血盆経もまたその影響力を拡大していた。そして、莆仙目連戯は『仏説大蔵正教血盆経』の内容を吸収した。これにより、目連は「普渡衆生」の大乗のすがた、つまり「己ひとりの母」を救う目連から、「天下の母」を救う目連に変容したのである。しかし、当時はまだ現実の超度儀式がおこなわれていなかったもので、それはただ「演戯」に過ぎなかった。一方、道教の血湖経は血池に墮ちる原因と対象（男女の別なし）とを拡大させ、あわせてその超度をおこなった。そして、この時に社会の善男信女たちも血湖経に基づいて亡き父母を超度した。目連戯はこの超度儀式を吸収し、実際の超度をおこなった。目連戯の変遷と血盆経の発展とは表裏一体をなし、お互いにこれを推進してきたのである。

5. 宗教儀式の融合した「目連救母」と「血盆経」の内容

莆仙地区でおこなわれる超度儀式のうち、現在、実施されているのは『目連救母』の人戯や木偶戯で、それは目連による破獄超度である。莆仙地区の『血盆胎骨経』、『血盆経』、『血盆宝経』、『血湖宝懺』についていうと、それらは、みな目連と関係があり、またいうまでもなく仏教や道教、三一教とも関係を持っている。三一教の「転蔵」は、すなわち血盆経や目連破獄を中心とした超度儀式である。

以下、筆者の調査および『三教薦修転蔵儀文』（新徳書院蔵）に基づいて、この儀式の過程を、簡潔に説明する。

転蔵儀式は三一教の蘭盆会における破獄儀式である。筆者は2001年9月1日に莆田市仙游県大濟鎮鐘峰村仙源祀でこの儀式をみた。

転蔵は仏教儀式のひとつであり、『仏学大辞典』によると、「大蔵経を転読するもの。転蔵と看蔵は同じではない。看とは毎行閲過し、自首徹尾すること。転とは毎卷之初中後数行を読むだけのことである。」³¹⁾ 仏教にはまた輪蔵もあり、次のように説明される。

【輪蔵】（堂塔）於大層龕中心，建一柱，開八面，架一切経，設機輪，可使施転，謂輪蔵。一旋之，則与看読同其功。梁伝大士創之。『釈門正統塔廟志』曰，“復次諸方梵刹立蔵殿者，初梁朝善慧大士（伝翁玄風）愍諸世人雖於世道頗知信，向然於贖命法宝，或有男女生来不識字者，或識字而為他縁逼迫不暇披閱者，大士為是之故，特設方便，創成鞍輪之蔵，令信心者推之一匝，則与看読同功。（略）又能旋轉不計数者，是人積功徳，則与誦経無異”³²⁾。

転蔵は、莆仙方言では「牽塔」ともいう。斎主が金を出し、「糊紙師」（莆仙方言で専門に紙馬、紙人、紙神などの祭を作る職人を指す）に神塔の制作を依頼する。塔の骨格は竹を編んで用い、外側には紙を貼る。塔の中心に大きな竹を入れて軸とし、塔が回転できるようにする。斎主がこの塔を回すので、「牽塔」の呼び名がある。斎主が塔を三周回すと、亡魂は塔の一階をのぼり、こうして魂は地獄から離れ、西方浄土に往生することができる。

塔の形は六角形で、計七階ある。地獄名、神仏名や十殿閻王の名などがそれぞれ分けて書かれてある。例えば、第一階には「血湖地獄」、「無常使者」、「地頭当境」、「牛頭將軍」、「血湖獄官」、「馬將軍」、第六階には「三一教主」、「令威真人」、「転輪冥王」、「阿難尊者」、

「都市冥王」,「司命灶君」,そして最上階の第七階には「極楽世界」,「接引導師」,「地藏尊者」,「目連尊者」,「観音大士」,「釈迦文仏」と書く。

塔の下には紙製の血湖があり,また血湖のわきにはハシゴがある。これらは血湖獄であり,それが地獄の最下層であることを示す。塔のわきには砂甕を逆さに置き,これまた地獄であることを示す。塔の下には十二光仏を表す油灯を準備する。それは地獄を照らして,亡魂や業魂を地獄から脱出させる。斎主はおのおの亡魂,業魂を表す紙人をささげ持つ。

道壇には鏡,筆を一つずつ置き,壇のわきには一羽の雄鶏を準備し,神仏の「開眼」に用いる。

(1) 開眼請聖

1. 起賛:主壇(経師)が「古嘆仏」を歌う。

「神通尊者啓慈門,飛錫曾游見血盆。憐憫男(女)人多受苦,東山啓請四尼尊。」(「内はすべて原文。以下同)

その内容は「請目連破獄,救出血獄中受苦男女」である。あわせて「四尼」を呼ぶ。

2. 浄壇:(略)。

3. 鏡文:八句七言詩。この鏡を業鏡とする。

4. 鶏文:八句七言詩。この鶏を老君,西天の靈鶏とする。鶏のトサカの血を神仏の点眼に用いる。

5. 筆文:仙,仏筆。点眼に用いる。

6. 点眼:主壇が鶏の血を取り,鏡と筆を清め,塔の前に行き,まず観音に点眼,次に釈迦牟尼,地藏,目連などに点眼する。「主壇は護蔵尊神を想慶」し,神仏たちが道場に降臨するのを待つ。

7. 疏文:教主慈悲,設宝蔵で血湖の罪人たちを超度する。血湖の情景は『仏説大蔵正教血盆経』の描写に似ていて,超度の対象は産婦をはじめとしてその他の者におよぶ。

8. 普召衆神仏。来臨を乞われる神仏は「四尼」,観音,阿難,地藏,目連,十大冥王,地獄鬼官,保蔵童子,推蔵童子などである。主壇は普召真言(略),変食真言(略),甘露真言(略),供養真言(略)を唱え,斎主たち,孝男女たちは神仏を拝す。

9. 請錫杖。主壇は地藏王に向かって錫杖を請い,地藏宝誥を唱える。

10. 回向(略)。

開眼請聖科儀においては,「起賛」でまず「目連破獄」を謳い,開眼の時に,目連を観

女性の救抜

音、釈迦、地藏に告ぐ四番目に配し、その他の神仏よりも前列に置く。破られる地獄は、血盆獄のみである。これは転蔵儀式が目連を中心としていること、そして血盆獄中の魂を超度の対象としていることをものがたる。ここに転蔵科儀と『目連救母』や『仏説大蔵正教血盆経』との関係の一端をうかがうことができる。

(2) 破獄科儀

1. 涌題：主壇が「古嘆仏」を歌う。前述のような四句七言詩で、再び「文曰」の四句を歌う。

人生在世百年稀，一旦無常有誰知。欲抜亡（業）魂登宝蔵，須凭尊者破血池。

主壇は唱や科白で「目連破獄」の力を讃える。主壇は再び「古嘆仏」を歌い、三教大宗師、西方諸仏菩薩、地獄十大冥王、三界十方諸賢の功德を称賛し、神仏に憐憫を求め、慈悲を賜り、法場に來臨し、衆魂を救うことを乞う。主壇はまた「孤雁穿」一曲を歌う。

皈命破獄目連師，演場清浄微妙法。三教四府諸聖賢，唯願慈悲作証明。

ここで再び目連に破獄を求め、目連の重要性が際だつ。

2. 鎮四方科儀：

(1) 奏大吹（楽器は嗩吶）

主壇は壇のところにいき錫杖を請い、目連に向かい「幡旗」を請う。東西の護壇は地藏宝誥を唱える（文略）。

(2) 主壇鎮四方

護壇が「海外題」を歌う（略）。各方において左に三周、右に三周。六丁六甲、護塔神將、護法護壇神將、八部天龍などを呼び、塔を護り、四方を鎮護する。

3. 破獄

(1) 主壇は「唯願尊者顯神通，手持金錫破獄。明珠照破幽冥路，亡（業）魂超出鬼門關。」と唱える。

(2) 「主壇用意破獄」

護壇が「破獄神咒」「破獄偈言」，「破獄真言」を唱える。儀礼の終了した後で，筆者が三一教経師の趙振栄氏（52歳，仙游県度尾鎮の人，この儀式の指導者）に主壇はどのように「用意破獄」をするのかと取材したところ，この時，主壇は「変化し，自分の身体が自分の身体でなくなる，つまり目連になる」との答えを得た。

(3) 主壇破獄

主壇は「六環金錫響，獄門独自開。亡（業）魂登宝蔵，合掌礼如来」と高くよばわり，錫杖で地上に「破」の字を書き，倒置された砂甕を打ち碎き，獄門が開かれたことを示す。主壇は「血盆化作蓮花水，苦海翻作極楽天」と黙念する。そして「破陣子」を歌う。

打破獄門救亡（業）魂，救出亡（業）魂離血盆。脱離血盆登宝塔，登上宝塔即西天。

また「車隊掛」を歌う。

西天乃是極楽国，極楽国上見現前。逍遥快樂皆自在，自在遨遊往西天。

そして「血盆咒」を唱える（文略）。

(4) 召魂

「主壇が幡旗を用いて召魂出獄」させ，「善召真言」を唱える（文略）。この時，主壇は紙人（亡魂の身代わり）を血盆のなかから取り出す。

(5) 開口

「主壇が針を用いて替身（紙人）の開口」をし，その後に斎主や孝男女に渡す。

(6) 沐浴

主壇が「去穢真言」を唱え，各斎主，孝男女は亡魂に沐浴をさせる。

(7) 更衣

主壇が「焚化仙衣神呪」を唱え、亡魂に更衣をさせる。

(8) 主壇が「開咽喉真言」, 「甘露真言」, 「供食真言」を唱え、亡(業)魂に「烏飯」を食べさせる(あらかじめ準備した「烏飯」の上に紙人を挿す)。

(9) 主壇が魂を導き塔にのぼらせる。

これで破獄科儀は終了である。

破獄科儀の「涌題」において、主壇は、四度、「賛頌」をし、目連に破獄を祈り求める。破獄の前に、主壇はまた四句の詩を読み、目連に破獄を請い、合計五回、目連に言及する。破獄の時に、主壇は目連に「転変」し、錫杖で破獄して、衆魂を血盆獄から超度する。木偶師の許阿菴によれば、血を見て死んだ者の超度は難しく、特に産婦は血湖獄に堕ちているので、三度の超度(三回の目連戯の上演)が必要だという。莆仙の人びとの地獄のイメージでは、血盆獄が最も恐ろしい地獄である。そして、ただ目連のみがかれらを超度して救うことができる。この破獄科儀を通して、血盆経および目連故事が莆仙において久しく流伝したこと、またその影響が深かったことを知ることができる。

(3) 転蔵

亡(業)魂は血盆獄から超度されると、七重の塔にのぼる。各階にのぼるごとに、齋主や孝男女が左回り、右回りに塔をそれぞれ三周させる。そうしてのち、亡魂ははじめて正式に地獄を離れることができる。転蔵の調査の時に、筆者が経師の趙振栄氏や楽師の趙信能氏に尋ねたところでは、血盆獄は最も深く、最も暗い地獄で、そこに堕ちた魂は最も超度しがたく、一回の読経や、一回の超度儀式では、普通は血盆獄の魂を煉瓦ひとつ分(約6センチ)しかのぼらせることができないとのことである。ただ、宝塔を回せば、その功德ははかりがたく、亡(業)魂を速やかに地獄から離れさせることができる。これらのことから、この転蔵は、仏教の転蔵(転読大蔵)や輪蔵(転輪之蔵)の儀式とほぼ同じものであることがわかる。そして、このことはまたわれわれに、宋代の莆仙の人びとが経幢を建てたことを想起させる(経幢の周囲を回り、自分の身体に経幢のホコリを浴び、経幢の風を受けるだけで、その功德は読経したのと同じことになる)。

亡(業)魂は血盆獄を離れると、さらに十殿閻王の審査を受け、そして後、解放される。

科儀の構造は三つの段階に分けることができる。第一に、主壇が疏文を宣し、血盆諸獄に墮ちた原因を述べる。主なものは女性の「産穢」,「産亡」である。第八殿では「十月懐胎」を歌う。第二に、主壇が「解冤釈結真言」を唱え、齋主や孝男女が宝塔を回して、魂を一階のぼらせるよう導く。第三に、「文曰」の四句詩で結ぶ。詩の第二句は「破獄目連大尊者」である。この三つの段階のうち、第二段階の「解冤釈結真言」を除く、あとの二つの段階は、やはり血盆経と目連救母の原型を合成した構造になっている。以下、順にそのことを述べよう。

第一殿：

1. 疏文

窃聞天宮宝蔵，実有非虚。由生前妄作罪花，致没後臨盆苦海。養男育女，血染江河滿地，縁終恩尽，魂飛劍樹刀山。五漏十血，豈無穢染之名。千辛万苦，難登解脫之場。窃思鸞飛風寡自傷情，母（父）死児孤成血泪。嗚呼！一朝座草，十月懐胎……魂魄偶属於陰司，璋瓦難通，子母（父）俱沈於大夜……既生既育，可憐子母（父）中分。休休無窮之憂処，忙忙不見慈（嚴）容……転繞天宮宝塔，賛揚万徳洪名。願脱閻浮生安養，速証弥陀上西天。

第一殿では女性が「産穢」,「産亡」により血湖獄に墮ちることから、亡父のことにまで説き及ぶ。超度とは父母の恩に報いることである。この疏文は『血盆経』と『父母恩重講経文』に基づいて作られた痕跡を留めている。

2. 真言

真言は略す。齋主，孝男女は左に三周，右に三周，塔を回す。

文曰：「翻思生前妄作時，万種艱辛只為児。十月懐胎難報徳，今宵超度頼慈悲。」
「五更子」：「只（莆仙方言で「這」の意味）夜叉走出地獄門，門前，見一前身，前身似目連。我是夏午尼弟子，特来救度上西天。……」

この一文一曲には、目連が母を救うために地獄を遍歴した痕跡がみられる。

女性の救拔

亡（業）魂は二階にのぼる。

3. 文曰：

「一真實際地藏師，破獄目連大尊者。陰府秦廣大明王，赦宥亡（業）魂早超昇。」

第二殿：

1. 疏文：「窃聞含珠掇露，結月懷胎，血水不流金水積，黒山不見兇刀山傷。生胎，車禍，懸梁，流血，吃菓穢体……願凭我師懺罪花，頓使亡魂承法令。」

この文の超度の対象は産婦からその他の非業の死を遂げた亡魂にまで拡大されている。

2. 真言：文略。

文曰：文略。【錦庭芳】：文略。鬼たちが苦しんでいるさまが描かれる。

この殿では亡魂は塔をのぼらない。

3. 文曰：「二尊大土地蔵師，破獄目連大尊者。陰府初江大明王，赦宥亡者早超昇升。」

第三殿：

1. 疏文：「窃聞身心憔悴，体節朦朧。……胎期不得，産難確何由？……含笑花未吐，忽遭風雨以摧殘，脱翳月初明，却被浮雲而復掩。不蒙我仏放慈光，汝等何由成法果？」

この文では難産で死んだ女性を超度する。これも『血盆経』の内容に拠る。

2. 真言：文略。斎主，孝男女による転蔵。

文曰：文略。「撲灯蛾」鬼たちの苦しんでいるさまが描かれる。

3. 文曰：「三途教主地藏師，破獄目連大尊者。陰府宋帝大明王，赦宥亡魂早超昇。」

第四殿：

1. 疏文：「窃聞驪珠在海，昆玉沈埃。美鏡無人空婦去，愁心有限血臨来。……血水注，金水淋，父（母）子不見入黄泉。亡魂愛子輕性命，失花一旦逐無常。血水皆由金水換，刀山木是血山招。……伏望慈悲垂接引，憐愍雪罪愆。」

この文もまた産婦が産血で神仏を汚して血盆獄に墮ちることを描くが、亡父にも説き及ぶ。「父母恩重」は後代がこれに報いねばならない。

2. 真言：文は略。転載。

文曰：「青衲襖」亡魂の苦しんでいるさまが描かれる。

この殿では亡魂は塔をのぼらない。

3. 文曰：「四趣趣中地藏師，破獄目連大尊者。陰府五官大明王，赦宥亡魂早超昇。」

第五殿：

1. 疏文：「……五漏恩纏多染汚，二縁会合尽長迷。抱恨懷中情何舍，血盆池内罪難当。不蒙我師垂慧照，亡者何由脱苦輪。」

2. 真言：文は略。転載。

文に曰く：文は略。【大歓悦】文は略。

魂は四階にまでのぼる。

3. 文曰：「五色摩尼地藏師，破獄目連大尊者。陰府閻羅大天子，赦宥亡者早超昇。」

第六殿：

第五殿とほぼ同じだが、魂は塔をのぼらない。その文には「六環金錫地藏師，破獄目連大尊者。陰府卞成大明王，赦宥亡魂早超昇。」とある。

女性の救拔

第七殿：

1. 疏文：「窃文露草凝酥，蚌胎得玉。……自業無多血業重，度生未幾兼生深。……六根既着於情河，五漏尽歸於業海。血湖腥臊，叫苦含昏。……期時染汚之罪難伸，恩愛之歆何在？……」

この文は女性が出産の汚れで血盆獄に墮ちることを説く。

2. 真言：文は略。転蔵。

文曰：文は略。「万牌令」「灯着来叩拜，叩拜，惟願赴蓮台。鞠育恩未報，致孝子泪哀哀。……」

孝子が母親を追善供養し，また母の恩に報いる気持ちを示す。

魂は五階にのぼる。

3. 文曰：文は略

第八殿：

1. 疏文：内容は女性の出産の難しさ，苦しさを述べたもの。

2. 真言：文は略。転蔵。

文曰：「懐胎座革命難量，倏忽精神随暗多郷。花為果残真可恨，蚌因珠吐实堪傷。」

十月懐胎：一月懐胎如露水，二月懐胎水茫茫。三月懐胎成人影，四月懐胎結成人。五月懐胎分男女，六月懐胎六根全。七月懐胎分七吼，八月懐胎毛發生。九月懐胎重如山，十月懐胎干辛。且看十月懐胎満，三年養育乳哺恩。今喜亡靈無苦怨，快登宝蔵礼観音。

この「十月懐胎」の歌と莆仙目連戯とは大同小異で，ここにも二者の関係がうかがわれる。上の「文」と「歌」の重点は，女性の懐胎の苦しさと母の恩の大きさを述べることにある。

魂は塔をのぼらない。

文曰：「八徹圉城地藏師，破獄目連大尊者。陰府平政大明王，赦宥亡靈早超昇。」

第九殿：

1. 疏文：父母と子供たち，また夫婦の関係を「冤業相纏」に帰結させる。
2. 真言：文は略。転藏。
文，真言，「億多嬌落花」：文は略。
魂は塔の六階にのぼる。
3. 文曰：「九泉泉下地藏師，破獄目連大尊者。陰府都市大明王，赦宥亡靈良早超昇。」

第十殿：

1. 疏文：主要な内容は人と動物の輪廻である。生前に「三寸舌根，万般血類」だったものは，死後「血盆倒懸を免れがたい」。
2. 真言：文は略。転藏。
文曰：文は略。
3. 「観音掃殿」：莆仙目連戯の上演の風俗では，芝居が終わった後に「観音掃殿」を演じる。これは「洗棚」といい，穢気や邪鬼の類を掃き清めることである。この段の機能は莆仙目連戯のものと同じである。
魂は塔の七階にのぼる。
文曰：「十号円明地藏師，破獄目連大尊者。陰府転輪大明王，赦宥亡靈往西方。」

(4) 終了

1. 主壇が疏文を読む。主壇は四尼教主，目連尊者に向かい，超度する亡（業）魂の名前，生年月日を告げる。その次に教主，目連の功德を讃える。

尊我師之教典，依目連之玄科。……振金錫三声，即令獄門自開，閔鎖自落。……消血盆，脱塵埃，離苦趣，早生天，永不墮黃泉之下，地獄之中。直造轉藏筵，皈依敬礼破

女性の救拔

獄師目連大尊者。上来所修転蔵道場已經円満，資助亡魂往生浄界。

2. 塔，紙人（魂の身代わり）を燃やす。

この科儀は17時30分に始まり，22時30分に終わった。

この科儀の特徴をまとめると以下のようになる。

1. 転蔵の「十殿」では絶えず血盆池獄に墮ちる原因が女性の「産穢」，「産亡」にあるということが繰り返される。特に「母の恩に報いる」孝行思想が際だち，早期血盆経との密接な関係がうかがわれる。

2. 目連破獄の，第一殿から第十殿までの「文曰」には，必ず「破獄目連大尊者」の一句があり，始終，目連の功德を讃えて，目連の地位と役割を際立たせる。それは「四尼」，つまり地藏菩薩をも超えている。そこからは「目連救母」の変文，雑劇，さらには戯曲から受けた影響がみられる。

3. 血盆獄に墮ちる原因がいくらか広げられ，出血で死んだ人なども入れられたが，無制限に広げられたわけではない。超度される対象に男性がいるとはいえ，それは亡父や出血して死んだ男性であり，「狐魂野鬼」の類や，戦士した将兵にまでは広げられていない。

これらのことから，この儀式ははじめは，女性を専門に超度するものであったこと，そしてそれはかつて莆仙地区に流伝していたと推測できる。それはまた明代にいたると，三一教により表面的な改変を加えられ，その科儀書に吸収されていったのである。

おわりに

以上述べてきたことをまとめると次のようになる。

1. 目連戯はその発展の過程で血盆経の内容を吸収した。莆仙目連戯『三殿告訴』の血湖から女性を超度する物語，また鄭之珍『目連救母善記』下冊「三殿尋母」で女性が子供を生み「血水が三光を汚した」ために血湖に墮ちたことを明らかにしていることなどが，

それを裏付ける。鄭之珍は女性超度の内容を削除したが、莆仙目連戯はその内容を完全に残している。

2. 血盆経の発展は発生期（北宋前後）、発展期（南宋、元）、最盛期（明、清）を経ていて、目連戯はその発展期に二つの段階に分けてその内容を吸収した。まず『仏説大蔵正教血盆経』の内容を吸収し、その次に血盆経の超度儀式を吸収していった。「情節超度」（物語での超度）と「戯中超度」ということばからその一端をうかがうことができる。

3. 北宋期の道教の血盆経は女性が血盆獄に堕ちる理由に「産亡」を付け加え、南宋、元の道教の血湖経は、ここからさらに、血湖に堕ちる原因を「刀亡」、「縊死」などさまざまなものに広げたが、これは莆仙目連戯で超度される対象が「非業の死」に限られることに対してたいへん大きく影響している。

4. 目連戯の発展とともに、血盆経を主とした超度儀式は、目連戯の物語をも吸収した。目連戯と血盆経はそのそれぞれの発展の過程で、互いに発展を促し、吸収しあってきた。ただし、目連戯の「戯中超度」の儀式は血盆経からきたものである。

目連戯という芝居、血盆経という経典、この両者が変化し、結合しつつ共同して、女性への蔑視と同情、侮蔑と賞賛、束縛と解放、懲罰と救^{すくい}拔の宗教女性史を書き上げたのである。

福建省芸術研究所 副研究員 馬建華

2002年9月25日

注

- 1) 日本・田仲一成『シンガポール 莆仙同郷会逢甲普度目連戯初探』、福建省芸術研究所編、『福建目連戯研究文集』、1991年。
- 2) 宋・黄岩孫『仙溪志』卷三『仙釈』、宋宝佑年間（1253-1258）刻本、仙游県文史学会点校、福建省地方志編纂委員会主編、福建人民出版社、1989年。
- 3) 翁忠言主編『莆田県志』、第36篇第6章『宗教』、第一節『仏教』、莆田県地方志編纂委員会編、中華書局、1994年。明・弘治年間『興化府志』、弘治年間『八閩通志』など参照。
- 4) 周益民主編『仙游県志』第32篇第3章『古建築』、仙游県地方志編纂委員会編、方志出版社、1995年。溝・乾隆年間『仙游県志』、明・弘治年間『八閩通志』など参照。
- 5) 『湄洲日報』、1995年10月22日第3版。石碑は現在、莆田県文化館所蔵。
- 6) 宋湖民『莆田金石木刻拓志本』。陳瞻佑『莆田南山広化寺歴代文献彙』、鉛印本、1986年。
- 7) 註（2）に同じ、卷五『叙県・風俗』。
- 8) 明・黄仲昭。『八閩通志』上册卷3『地理』。明・弘治年間刊本、福建省地方志編纂委員会旧志整理組、福建省図書館特蔵部整理、福建人民出版社、1989年。
- 9) 明・盧文輝『林子本行実録』、附清・董史述撰『三教再伝陳子本行』、清・順治乙未年（1655）刊本。
- 10) 同上。
- 11) 『新唐書』卷145、『列伝』第70『王緝』。
- 12) 註（2）に同じ。卷4『唐及五代人物』。
- 13) 日本・宮次男「目連救母説話とその絵画」、『美術研究』第255号、東京国立文化財研究所、昭和44年第5期、後に『仏説目連救母経』全文、小比丘法祖、日本貞和二年（1346）重刊本。この経典の年代には二つの説があり、ひとつは元の辛亥年、すなわち憲宋元年（1251）もうひとつは南宋・理宗淳佑11年（1251）である。本論文はこれを採用している。一説には元の武宗至大四年（1311）とも。
- 14) 馬建華「福建莆仙戯『目連救母』原型探潮」、『文藝研究』2001年第4期。「唐宋仏教特徴看莆仙戯『目連救母』之原型」、『芸術論叢』第19期、福建芸術研究所編、2000年、参照。目連の形象の大乗化については、莆仙仏教の専門家である楊美煊氏に教示いただき、大きな参考となった。
- 15) 王重民等編『敦煌變文集』、下集卷6、人民文学出版社、1984年。
- 16) 註（15）に同じ。
- 17) 註（15）に同じ。
- 18) 註（15）に同じ。
- 19) 明・鄭之珍『目連救母勸善記』、下巻『八殿尋母』、『古本戯曲叢刊』初集（明刊本影印本に基づく）。
- 20) 『大日本続蔵経』第1輯第87套第4冊。
- 21) 日本・牧野和夫、高達奈緒美「血盆経の需要と展開」、「女と男の時空—日本女性史再考3女と男の乱—中世」、藤原書店、1996年。
- 22) 陳翹『宗教法事における目連』、(1) に同じ。

- 23) 註(15)に同じ。
- 24) 『正統道藏』、『正一部』、第942-962冊、台北文藝印書館、1977年。
- 25) 同上、『洞玄部・威儀類』第208-263冊。
- 26) 同上、『洞玄部・本文類』第32冊。
- 27) 同上、『洞玄部・威儀類』策296冊。
- 28) 胡孚琛主編『中国道教大辞典』第288、312頁、中国社会科学出版社、1995年。
- 29) 註(19)に同じ。下巻『三殿尋母』。
- 30) 陳翹「援儒入仏 善悪別裁一從『目連救母勸善記』劉青提の罪与罰説起」、『芸術百家』2002年5期。
- 31) 丁福宝編『仏学大辞典』、第282頁、上海仏学書局、1996年。
- 32) 同上、第2639-2640頁。